

認知欲求尺度に関する基礎的研究

神山 貴弥・藤原 武弘

広島大学総合科学部人間行動研究講座
(1989年10月31日受理)

The Fundamental study of the Need for Cognition Scale

Takaya KOHYAMA and Takehiro FUJIHARA

Abstract

The purpose of present study was to develop the Japanese version of the Need for Cognition Scale (NCS). Forty-five items, which had been used in the United States to select NCS, were administered to two groups. One group answered the items once, and the other group did twice and gave two sets of data. A factor analysis was performed on each set of three data, and yielded one major factor. The fifteen items, which gave high loadings on the every first factor and had no sex differences on scores, were selected as the Japanese version of NCS. The reliability and the validity of this scale were confirmed by some analyses.

近年、態度変容研究の分野では、従来の一貫しない結果や多様な理論を統合する一般理論として、Elaboration Likelihood Model (ELM) が提唱されている (Petty, & Cacioppo, 1986a; 1986b)。ELM では、態度変容に到る異なる2つのルートを仮定している。その1つが、説得に用いたメッセージの内容を十分に検討して態度変容に到る中心的ルートである。そしてもう1つが、メッセージの内容とは関係のない周辺の手がかり (送り手の専門性やメッセージの論拠の数など) の影響を受けて態度変容に到る周辺的ルートである。これらの2つのルートのどちらによって態度変容が引き起こされるのかは、メッセージに含まれる情報を処理しようとする動機づけと、その説得場面における情報処理能力によって規定される。つまり、動機づけと能力の両方が高い場合には中心的ルートを、またこれら両方、あるいはいずれか一方が低い場合には周辺的ルートを経て態度変容が引き起こされると仮定されている。

ところで、本研究で扱う認知欲求 (NC) とは、ELM において扱われている情報を処理しようとする動機づけに影響を及ぼす一要因である。NC とは、元々 Cohen, Stotland, & Wolfe (1955) によって提唱された個人差に関する概念であり、「意味づけられ、統合される様に、関連した状況を構造化しようとする欲求。また、これまでに経験してきた世界を理解し、合理的にしようとする欲求」と定義づけられるものであった。Cacioppo, & Petty (1982) は、この NC に関する概念をより限定された個人差のことを表すために、「認知的な努力に従事し、それを楽しむ内発的動機づけの個人差。あるいはその統計学的な傾向」と再定義した。

また Cacioppo, & Petty (1982) は、この定義に基づき NC の尺度化を行っている。研究1では、まず Cohen et al. (1955) の NCS に関する記述や Mehrabian, & Banks (1978) などの達成傾向を測定する尺度に基づいて、NC を反映すると思われる45項目を選出した。そして、これ

らの項目について、NC が異なると思われる2つの集団のメンバーを対象に回答を求めた。その結果、2つの集団を弁別し、さらに性差がみられない34項目を抽出するとともに、因子分析によって尺度の一次元性を確認した。研究2では、研究1で抽出した34項目について、等質性の高いと思われる集団（大学生）のみを対象に回答を求めた。その結果、研究1で得られたのと同様の因子構造を得た。また被調査者は、French, Ekstrom, & Price (1963) による場依存性に関する認知スタイルのテストと、Sarason (1972) によるテスト不安の尺度にも同時に回答しており、NC は認知スタイルとは弱い正の相関があり、またテスト不安とは相関がないことが明らかになった。研究3では、NC と一般的な知能を反映すると思われる American College Testing Program Exam (ACT) の得点、ドグマティズム (Troidahl, & Powell, 1965)、および社会的望ましさ (Crowne, & Marlowe, 1964) の間の関係が検討された。その結果、NC は知能と正の相関、ドグマティズムとは負の相関があること、そして社会的望ましさとの間には相関がないことが明らかになった。さらに研究4では、NCS を用いて被験者を高認知欲求者 (HNC) と低認知欲求者 (LNC) に分類し、複雑な課題と単純な課題を行わせた。その結果、HNC はLNC よりも複雑な課題を楽しんで行っていたことが示された。この一連の研究から、NCS の信頼性および妥当性が確認されている。また、Petty, & Cacioppo (1986b) は、Cacioppo, & Petty (1982) で抽出していた34項目をさらに精選し、18項目を紹介している。

一方、こうしたNCS を用いて、実際にELMの検証も進められている。例えば、Cacioppo, Petty, & Morris (1983) は、被験者をNCS を用いてHNC とLNC に分類した上で説得的メッセージを与え、その説得効果を検討した。その結果、HNC はLNC よりもメッセージの論拠の質の影響を強く受けることを見出した。つまり、HNC はLNC よりも、もっともらしい論拠（強論拠）を持つメッセージを受けた際にはより唱導方向への、またもっともらしくない論拠（弱論拠）を持つメッセージを受けた際には唱導とはより反対方向への態度を示した。このことは、HNC が中心的ルートに沿って態度変容を引き起こしたことを示唆するものである。また、Cacioppo, Petty, Kao, & Rodriguez (1986) は、実験1でCacioppo, Petty, & Morris (1983) の知見を確認するとともに、実験2ではHNCの方がLNCよりも態度と行動の間の一貫性が高いことを示している。

本研究は、こうしたNCSの日本語版を作成し、その信頼性と妥当性を検討することを目的とする。なお、妥当性の検討の1つとして、NCが情報を処理しようとする動機づけに影響を及ぼす一要因であることを考慮し、刺激や情報に対する感受性や処理様式と関連のある以下の3つの尺度との関係を検討する。1. 感覚希求尺度 (Sensation-Seeking Scale: SSS) 「刺激の最適水準」という概念に基づき、この個人差を測定するためにZuckerman, Kolin, Price, & Zoob (1964) によって標準化された尺度。感覚希求は「新奇で変化する感覚や経験に対する要求についてのパーソナリティ特性、またそのような経験を得るためには少々の社会的リスクや身体的リスクを厭わないパーソナリティ特性」と定義される。2. セルフ・モニタリング尺度 (Self-Monitoring Scale: SMS) 状況的要因に対する反応の個人差を測定するためにSnyder (1974) によって開発された尺度。セルフ・モニタリングは「状況や他者の行動に基づいて、自己の表出行動や自己呈示が、社会的に適切なのかを観察し、自己の行動を統制すること」と定義される。3. 刺激透過性尺度 (Stimulus Screening Scale: この尺度により Screener と Non-screener が大別されるので、ここではS-NSと略記する) 環境に対する反応、特に刺激に対する透過性の個人差を測定するためにMehrabian (1976) によって開発された尺度。Screener は「何について反応するかを選択性の高い人」、Non-screener は「環境の如何を問わず、何に対して反応するかを選択性に乏しい人」と定義される。

方 法

【調査1】 被調査者 一般心理学受講の大学生184名（男性104名，女性80名）を対象とした。
調査項目 Cacioppo, & Petty (1982) が用いた45項目のNCSに基づきその日本語版を作成し（Table 1 参照），各項目について7段階（1：全くそうでない～7：非常にそうである）で回答させた。

調査時期 1988年7月に実施した（このデータを88データとする）。

実施方法 大学の講義時間の一部を利用し，質問紙形式で集団に対して一斉に実施した。

【調査2】 被調査者 一般心理学受講の大学生を対象とした。計5回の調査それぞれに回答した人数の詳細は次の通りである。第1回 NCS（男性186名，女性147名，不明3名，計336名），第2回 NCS（男性174名，女性136名，不明3名，計313名），SSS（男性177名，女性145名，不明3名，計325名），SM（男性186名，女性147名，不明3名，計336名），S-NS（男性174名，女性145名，不明3名，計322名）。

調査項目と調査時期 (1)NCS 調査1で用いたのと同様のNCSを，1989年6月と7月（1ヶ月の期間を設けた）に実施した。なお，以下前者をPREデータ，後者をPOSTデータとする。(2)SSS 寺崎・塩見・岸本・平岡（1987）に示された38項目から成る日本語版SSSを用いた。これらは，次の4つの下位尺度から構成されていた。①TAS尺度 身体的に多少の危険を伴うスポーツなどの活動を好む傾向に関するもの。②ES尺度 身体的にはあまり危険を伴わない活動を通してであるが，新奇な経験を得ようとする傾向に関するもの。③Dis尺度 社会的抑制を取り払って思いきり騒いだり，他人の目を気にすることなく自由に自己表現を行おうとする傾向に関するもの。④BS尺度 退屈を感じやすい傾向に関するもの。(3)SMS 岩淵・田中・中里（1982）に示される25項目からなる日本語版のSMSを用いた。これらは以下の3つの下位尺度から構成されていた。①外向性尺度 外的・社会的な事柄への関心が高く社交的であることを示す。②他者志向性尺度 他者や状況への関心や配慮などで，ある状況での行動の適切さへの関心，また他者や状況を考え自己の気持ちを抑えることを示す。③演技性尺度 演技して他者を喜ばせたり，人前で流暢に話せることを示す。(4)S-NS 藤原（1983）が用いた40項目から成る日本語版S-NSを用いた。これらは以下の5次元から構成されており，それぞれの次元に高負荷を示した項目から下位尺度を作成した。①一般的低覚醒。②嗅覚・触覚の透過性。③天候の変化に対する低覚醒。④順化の速さ。⑤複合的事態での低覚醒。なお，(2)(3)(4)の各尺度は，1989年の4月～5月の期間中に，それぞれ別々に実施された。

実施方法 各調査とも調査1と同様の方法で実施した。

結 果

1. 項目の選定 (1) 因子構造からの検討 NCSの各データを基に，それぞれ主因子法による因子分析を行った。Table 1には，各データ毎の第1因子への因子負荷量が示されている。88データの第1因子の固有値は9.21，説明率は20.5%，第2因子，第3因子の固有値はそれぞれ2.68，2.26，説明率はそれぞれ5.9%，5.0%であった。またPREデータの第1因子の固有値は9.42，説明率は20.9%，第2因子，第3因子の固有値はそれぞれ2.57，2.26，説明率はそれぞれ5.7%，5.0%であった。さらにPOSTデータの第1因子の固有値は9.29，説明率は20.7%，第2因子，第3因子の固有値はそれぞれ3.00，2.35，説明率はそれぞれ6.7%，5.20%であった。これらから明らかなように，各データの因子構造は非常に似ており，いずれ

も第1因子が優勢であることを示している。そこで、第1因子がNCを反映していると考え、3つのデータに共通して第1因子に対して.40以上の高負荷量を示した21項目をNCSの候補項目として抽出した (Table 1, 2 参照)。

Table 1 各調査データの因子分析の結果得られた第1因子への因子負荷量

認知欲求尺度項目	調査				
	A	B	C	D	E
1 いろいろな問題の新しい解決方法を考えることは楽しい。	.62	.42	.52	.60	.53
2 一生懸命に物事を考えれば、自分の人生の目標は達成できると思う。			.22	.25	.33
3 自分の知的能力には信頼をおいている。			.29	.38	.35
4 あまり考えなくてもよい課題よりも、頭を使う困難な課題の方が好きだ。	.58	.43	.54	.68	.68
5 かなり頭を使わなければ達成されないようなことを目標にすることが多い。	.44	.48	.54	.57	.57
* 6 読んだものがよく理解できないとき、それを放り出し忘れてしまう。			.37	.46	.52
7 自分が考えて出した結論には自信がある。			.27	.44	.36
* 8 他の人が困難だという問題は考えないことが多い。			.41	.56	.62
9 課題について必要以上に考えてしまう。	.36	.40	.43	.41	.43
* 10 新しい考え方を学ぶことにはあまり興味がない。	.62	.46	.51	.54	.49
* 11 重要な事柄について考えて決定した後でも、それを決断するのをためらってしまう方である。	.32	.16	.04	.21	.21
12 その問題が直接には自分に関係ない時でもそれについて結局考えてしまう。	.53	.21	.36	.30	.44
* 13 なぜそうなったかを理解しようとするよりも、そのことについて深く考えない方が好きだ。	.51	.41	.66	.54	.64
* 14 新しい違った事態で考えるのは苦手だ。	.52	.40	.38	.52	.41
* 15 出世するためには思考力がなければならないという考え方には興味がない。	.65	.52	.13	.20	.28
* 16 物事を抽象的に考えることは好きではない。	.58	.42	.44	.26	.31
17 私は知力に頼る方である。	.43	.42	.72	.27	.23
18 一生懸命考え、多くの知的な努力を必要とする重要な課題を成し遂げることに特に満足を感じる。			.59	.55	.60
* 19 必要以上には考えない。	.68	.54	.59	.54	.48
* 20 切迫した状況の下ではうまく考えられない。	.49	.33	.22	.36	.35
* 21 一度覚えてしまえばあまり考えなくてもよい課題が好きだ。	.65	.54	.51	.58	.60
* 22 長期的な計画よりも、日々の細かな計画について考える方が好きだ。	.67	.44	.20	.00	.16
* 23 自分の思考能力を試すようなことよりもむしろあまり考えなくてもよいようなことをする方がよい。	.70	.62	.63	.69	.74
* 24 長時間一生懸命考えることは苦手な方である。	.69	.49	.59	.62	.65
* 25 考えなければならない時しか考えない方である。			.57	.45	.48
26 他の人と話す時は、有名人のゴシップや噂話についてよりもむしろ国際問題の解決方法について話すことが多い。	.23	.30	.33	.32	.30
* 27 現代は、知的な仕事でさえ、しかるべき人脈がなければうまくいかないと思う。	.27	.32	.35	-.03	.00
* 28 考えすぎると間違えてしまう。	.38	.42	.09	.20	.24
* 29 深く考えなければ切り抜けられないような事態に対処することには責任を負いたくない。	.77	.59	.60	.61	.61
30 自分の思考の長所や短所に気づく機会があれば、それはうれしいことである。	.43	.37	.36	.36	.27
* 31 知的な努力をかなり必要とする課題をやり終えた後は、満足するよりもむしろほっと安心する。	.57	.53	.37	.20	.20

*32	考えることは楽しくない。	.72	.56	.60	.59	.57
*33	深く考えなければならぬような状況は避けようとする。	.69	.63	.62	.71	.66
*34	自分が人生で何をすべきかについて考えるのは好きではない。			.51	.51	.51
35	娯楽番組よりも教育番組を見る方が好きだ。	.28	.40	.33	.40	.36
36	自分で解こうと決めた困難な問題はだいたい解くことができる。			.44	.30	.36
37	自分の周囲の人たちが知的な時には、自分にもよい考えが浮かんでくる。	.43	.21	.34	.34	.34
38	常に頭を使わなければ満足できない。			.58	.52	.44
39	自分の人生は解決しなければならない難問が多い方がよい。	.61	.53	.41	.49	.43
40	簡単な問題よりも複雑な問題の方が好きだ。	.81	.57	.65	.64	.61
*41	問題の答えがなぜそうなるのかを理解するよりも、単純に答えだけを知っている方がよい。	.52	.47	.57	.52	.54
42	問題を考えている時には、他の人の主張する解答よりも自分の解答の方が重要である。			.09	.10	.04
*43	なぜ、どのように仕事が進んでいくかという過程よりも、仕事の結果に満足する。	.55	.47	.40	.41	.30
*44	物事は知らない方がよいと思う。	.23	.23	.19	.20	.26
45	自分の考えた結論が問題の結末に関係ないときでも、考えることは楽しい。	.36	.37	.33	.55	.46

- 注) 1. 調査は、A-Cacioppo, & Petty (1982) の研究 1, B-Cacioppo, & Petty (1982) の研究 2, C-88 データ, D-PRE データ, E-POST データを示す。
 2. 項目番号の前の*は、逆転項目を示す。
 3. 表中の は、日本語版 NCS で .40 以上の負荷量を示したものに付けられている。

(2) 性差からの検討 (1)で抽出された NCS の21の候補項目について、その得点において性差がみられる項目を取り除くために、各データ毎に21項目それぞれの男女別の平均点を算出し、t 検定によって差の検定を行った。Table 2 には、各データ毎に算出した21項目それぞれの男女別平均点およびその標準偏差と各 t 検定の結果が示されている。3つのデータのいずれか1つにでも有意な性差がみられた6項目を取り除き、最終的には15項目を NCS として選択した (Table 2 参照)。従って以下の分析では、この15項目の平均得点を NC 得点として扱い (逆転項目の得点は尺度値を逆転させたものを用いて算出した)、その信頼性および妥当性の検討を行った。

2. 信頼性の検討 (1) 内的整合性からの検討 NC の各データ毎に、選定された15項目の NCS についてクロンバックの α 係数を算出した。その結果、88データでは $\alpha = .86$, PRE データでは $\alpha = .88$, POST データでは $\alpha = .87$ と、いずれの場合も高い内的整合性を示す結果を得た。

(2) 折半法からの検討 NC の各データ毎に、選定された15項目を項目番号 4. 9. 18. 21. 24. 32. 34. 39. 41. と項目番号 5. 10. 19. 24. 33. 38. 40. に二分し、それぞれの合計得点間の相関係数を求めた。なおこの際、スピアマン・ブラウンの公式を用いて修正したものを信頼性係数とした。その結果、88データでは $r = .86$ ($n = 184, p < .01$), PRE データでは $r = .89$ ($n = 340, p < .01$), POST データでは $r = .87$ ($n = 313, p < .01$) といずれのデータにおいても2つの合計得点間には強い正の相関関係を得た。

(3) 再テスト法からの検討 PRE データと POST データにおける NC 得点を基に再テスト信頼性係数を算出した。その結果、 $r = .74$ ($n = 264, p < .01$) と強い正の相関関係を得た。

3. 妥当性の検討 (1) 先行研究との比較 日本語版 NCS の因子分析の結果を、Cacioppo, & Petty (1982) の研究 1 と研究 2 で得られた NCS の因子分析の結果を比較することで、日本

Table 2 各調査データ毎にみたNCS候補項目の男女別平均点およびその標準偏差とt検定の結果

項目番号	88 データ			PRE データ			POST データ		
	男 (n=104)	女 (n=80)	t値 (df=182)	男 (n=197)	女 (n=143)	t値 (df=338)	男 (n=174)	女 (n=136)	t値 (df=308)
1	5.27(1.26)	4.95(1.17)	1.76	5.08(1.46)	4.85(1.26)	1.47	5.33(1.10)	4.94(1.11)	3.11
4	4.40(1.44)	4.16(1.39)	1.14	3.96(1.45)	3.82(1.23)	0.90	4.09(1.35)	3.93(1.25)	1.06
5	3.90(1.29)	3.79(1.33)	0.60	3.95(1.41)	3.75(1.26)	1.35	4.06(1.32)	3.83(1.26)	1.57
8	4.85(1.19)	4.50(1.13)	2.05	4.72(1.30)	4.43(1.22)	2.11	4.61(1.21)	4.17(1.14)	3.30
9	4.32(1.40)	4.31(1.25)	0.07	4.49(1.41)	4.37(1.30)	0.81	4.57(1.24)	4.59(1.19)	-0.10
10	5.33(1.13)	5.18(0.96)	0.96	5.36(1.12)	5.30(1.02)	0.46	5.27(1.00)	5.10(0.97)	1.55
13	4.58(1.55)	4.75(1.24)	-0.77	4.91(1.32)	4.53(1.28)	2.62	4.79(1.15)	4.47(1.28)	2.38
18	5.05(1.14)	4.81(1.14)	1.39	4.81(1.20)	4.70(1.23)	0.84	4.89(1.07)	4.65(1.10)	1.92
19	4.30(1.32)	4.43(1.40)	-0.63	4.65(1.29)	4.59(1.40)	0.38	4.59(1.36)	4.61(1.36)	-0.12
21	3.13(1.28)	3.35(1.28)	-1.14	3.71(1.29)	3.79(1.27)	-0.60	3.79(1.27)	3.71(1.21)	0.60
23	4.37(1.28)	4.39(1.10)	-0.12	4.38(1.34)	4.10(1.24)	1.95	4.40(1.22)	4.08(1.17)	2.34
24	3.84(1.56)	3.93(1.23)	-0.14	4.05(1.47)	3.84(1.41)	1.30	4.10(1.44)	3.99(1.42)	0.68
25	4.09(1.24)	4.44(1.10)	-2.00	3.96(1.47)	3.93(1.55)	0.21	3.80(1.39)	4.09(1.40)	-1.81
29	3.74(1.41)	3.99(1.21)	-1.26	3.72(1.29)	3.60(1.13)	0.89	3.83(1.22)	3.42(1.18)	2.97
32	4.75(1.17)	4.71(1.01)	0.23	5.13(1.14)	5.11(1.15)	0.10	5.11(1.17)	5.00(1.14)	0.82
33	4.13(1.22)	4.31(1.07)	-1.03	4.23(1.26)	4.14(1.23)	0.65	4.21(1.23)	4.25(1.17)	-0.27
34	4.73(1.26)	4.88(1.11)	-0.88	4.94(1.40)	5.14(1.36)	-1.32	4.96(1.35)	4.96(1.32)	0.03
38	4.07(1.19)	4.16(1.22)	-0.53	3.26(1.10)	3.22(1.04)	0.30	3.63(1.09)	3.54(0.99)	0.75
39	3.75(1.24)	4.01(1.11)	-1.49	3.69(1.41)	3.64(1.40)	0.27	3.98(1.34)	3.72(1.20)	1.75
40	3.78(1.17)	4.00(1.03)	-1.34	3.84(1.30)	3.76(1.13)	0.59	4.02(1.16)	3.79(1.01)	1.88
41	4.73(1.33)	4.69(1.15)	0.23	5.31(1.27)	5.38(1.30)	-0.48	5.16(1.22)	5.08(1.18)	0.58

注) 1. 逆転項目 (項目番号 8, 10, 13, 19, 21, 23, 24, 25, 29, 32, 33, 34, 41) の平均点は尺度値を逆転させた後に算出したものであり, 各項目とも数値が大きいがNCが高いことを示す。
 2. () 内の数値は, 標準偏差を示す。
 3. t値に [] のある項目は, $p < .05$ で男女の平均点に有意差があることを示す。
 4. 項目番号に [] のある項目が, t検定の結果除去した項目である。

語版 NCS の内容の妥当性を検討した。Table 3 には、Cacioppo, & Petty (1982) の研究 1 と研究 2 で得られた第 1 因子負荷量と本研究の 3 つのデータから得られた第 1 因子負荷量それぞれ相互の相関係数が示されている。Table 3 から明らかのように、どの負荷量間にも強い正の相関が示されており、日本語版 NCS にみられる因子負荷量のパターンと先行研究の NCS にみられる因子負荷量のパターンは一貫していることがわかる。従って、日本語版 NCS の内容の妥当性はある程度保証されていると考えられる。

Table 3 第 1 因子負荷量に関する調査間の相関

	研究 1 Item=34	研究 2 Item=34	88 データ Item=45	PRE データ Item=45	POST データ Item=45
研究 1	—	.76**	.53**	.53**	.59**
研究 2		—	.60**	.55**	.54**
88 データ			—	.72**	.71**
PRE データ				—	.94**
POST データ					—

- 注) 1. 表中の ** は $p < .01$ で有意であることを示す。
 2. 研究 1 と研究 2 は、Cacioppo, & Petty (1982) のものである。

(2) 他尺度との比較 選定された NCS が独自性のあるものなのか、あるいは何らかの尺度との間に関係がみられるものなのかを検討するために、PRE データと POST データの NC 得点と、SSS, SMS, S-NS の合計得点および各尺度の下位尺度得点間の相関係数を算出した。この結果を示したのが、Table 4 である。Table 4 からわかるように、NCS はほとんどの尺度と相関がない。相関がみられたのは、PRE データの NCS と SMS の下位尺度である外向性尺度と演技性尺度との間の正の相関と、SSS の下位尺度である BS 尺度との間の負の相関、および POST データの NCS と S-NS の合計得点と下位尺度である一般的低覚醒と嗅覚・触覚の透過

Table 4 NCS と他尺度との間の相関

NCS	SSS					n
	合計得点	TAS	ES	Dis	BS	
PRE データ	-.06	.00	.02	-.07	-.15**	325
POST データ	-.02	-.08	-.03	.01	.06	313

NCS	SMS				n
	合計得点	外向性	他者志向性	演技性	
PRE データ	.10	.13*	.08	.15**	336
POST データ	-.01	-.02	-.02	.00	313

NCS	S-NS						n
	合計得点	一般的低覚醒	嗅覚・触覚の透過性	天候への透過性	順化の速さ	複合的事態での低覚醒	
PRE データ	-.05	-.06	-.02	-.02	.01	-.03	322
POST データ	-.12*	-.14*	-.17**	-.02	-.04	-.10	313

- 注) 表中の ** は $p < .01$ で、* は $p < .05$ で有意であることを示す。

性との間の負の相関である。このようにいくつかの尺度とは相関関係がみられたもののいずれも高い相関とは言えないし、PRE データと POST データの間に一貫した相関関係が得られなかった。従って、NCS は SSS, SMS, S-NS といった刺激や情報に対する感受性や処理様式に関連する尺度とは独自の尺度であることが示唆された。

考 察

本研究によって、15項目から成る日本語版 NCS が作成され、その信頼性と妥当性がいくつかの面から確認された。特に、時期や被験者の異なる3つのデータを基に項目選定のために行った因子分析の結果から、NCS はかなり構造的に安定した尺度と言えた。つまり、国際間（日本と合衆国）、一定期間（一年間）をおいた後の異なる被験者間（88データと PRE・POST データ）、一定期間（一ヶ月間）をおいた後の同一被験者間（PRE データと POST データ）で、ほとんど同一の因子構造を示したからである。しかし、本研究の結果だけでは、全ての妥当性についての保証はできない。例えば、本研究では大学生だけを被調査者としていたので、本研究で得られた NCS の構造、信頼性、妥当性が、他の属性や年代のサンプルを対象とした場合に繰り返してみられるという保証はないからである。従って今後は、本研究で扱ったサンプル以外でも同様の結果がえられるかどうかを検討し、さらに妥当性を高める必要があるといえよう。

本研究では、NC が情報を処理しようとする動機づけに影響を及ぼす要因であることに着目し、刺激や情報に対する感受性や処理様式に関連する尺度との間の関係を探ろうとした。しかし、これらの間には特に密接な関係はみられなかった。これは、NCS が情報を与えられた後の内発的な動機づけに関する個人差を扱うのに対して、特に SSS や S-NS は刺激や情報との接し方に関する個人差を扱っているからであろう。NC はいくつかの尺度との間に統計的に有意な相関関係がみられたが、これは対象としたサンプル数が多かったために得られたものであり、いずれも高い値ではない。また、PRE データと POST データの間にも一貫した相関関係が得られておらず、他尺度との関係については今後も検討して行かなければならないだろう。

最後に、NC と知能の問題について触れておく。序論でも述べたように、NC は知能（ACT の得点）と正の相関があることが報告されている（Cacioppo, & Petty, 1982）。また Cacioppo, Petty, Kao, & Rodriguez (1986) は、実験1において、NC が言語性知能と正の相関があることを見出している。そして、この実験では言語性知能を共変数として扱い、NC は共変数の効果を取り除いてもなおかつ態度変容に影響を与える要因であることを示した。ここでの問題点は、NC が知能と共変関係にあることである。もしそうなら、NC は情報を処理しようとする動機づけだけでなく、情報を処理する能力にも影響を及ぼす要因となり、ELM で仮定しているように、NC は単に動機づけを操作する要因だけではなくなる。従って、今後 NCS を ELM 研究の中で扱っていく場合には、知能、あるいは情報処理能力との関係を抑えておく必要があるだろう。

本研究の一部は、文部省科学研究費（一般研究C 課題番号63510062 代表者 藤原武弘）の援助を得て実施された。

引用文献

- Cacioppo, J. T. & Petty, R. E. 1982 The need for cognition. *Journal of Personality and Social Psychology*, 42, 116-131.

- Cacioppo, J. T., Petty, R. E. & Morris, K. 1983 Effects of need for cognition on message evaluation, recall, and persuasion. *Journal of Personality and Social Psychology*, **45**, 805-818.
- Cacioppo, J. T., Petty, R. E., Kao, C. F. & Rodriguez, R. 1986 Central and peripheral routes to persuasion: an individual difference perspective. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 1032-1043.
- Cohen, A. R., Stotland, E. & Wolfe, D. M. 1955 An experimental investigation of need for cognition. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **51**, 291-294.
- Crowne, D. P. & Marlowe, D. 1964 *The approval motive*. New York: Wiley.
- French, J. W., Ekstrom, R. B. & Price, L. A. 1963 *Kit of reference test for cognitive factors*. Princeton, N. J.: Educational Testing Service.
- 藤原武弘 1983 Mehrabian の刺激透過尺度に関する基礎的研究 (未発表資料) 広島大学
- 岩淵千明・田中国夫・中里浩明 1982 セルフ・モニタリングに関する研究 心理学研究, **53**, 54-57.
- Mehrabian, A. 1976 *Manual for the questionnaire measure of stimulus screening and arousability*. Unpublished manuscript, UCLA.
- Mehrabian, A. & Banks, L. 1978 A questionnaire measure of individual differences in achieving tendency. *Educational Psychological Measurement*, **38**, 475-478.
- Petty, R. E. & Cacioppo, J. T. 1986a The elaboration likelihood model of persuasion. *Advances in Experimental Social Psychology*, **19**, 123-205.
- Petty, R. E. & Cacioppo, J. T. 1986b *Communication and persuasion: central and peripheral routes to attitude change*. New York: Springer-Verlag.
- Sarason, I. G. 1972 Experimental approaches to test anxiety: attentional and the uses of information. In C. D. Spielberger (Ed.), *Anxiety: current trends in the theory and research* (Vol. 2). New York: Academic Press.
- Snyder, M. 1974 Self-monitoring of expressive behavior. *Journal of Social and Personality Psychology*, **30**, 526-537.
- 寺崎正治・塩見邦雄・岸本陽一・平岡清志 1987 日本語版 Sensation-Seeking Scale の作成 心理学研究, **58**, 42-48.
- Troidahl, V. C. & Powell, F. A. A. 1965 A short-form dogmatism scale for use in the field studies. *Social Forces*, **44**, 211-214.
- Zuckerman, M., Kolin, E. A., Price, L. & Zoob, I. 1964 Development of Sensation-Seeking Scale. *Journal of Consulting Psychology*, **28**, 477-482.